金光教の声

（平成22年10月～12月放送分）

No. 393

【もくじ】

「青葉城の石垣」（放送センター）・・・・・・・・・・3
「心のよりどころ」（放送センター）・・・・・・・・・8
「私が彼に惹かれた理由」（放送センター）・・・・12
「吉野山踏み迷うても花の中」（渕上忠保）・・・・16
「井戸の掃除をするように」（放送センター）・・20
「寮母さんは大忙し」（放送センター）・・・・・・24
「祈りには必ずおかげがつく」（放送センター）・28
「千五百キロ離れていても」（放送センター）・・32
「心イキイキ、デザイン キラキラ！」
（今北紘一）・・・・・・36
「親の心」（放送センター）・・・・・・・・・・・・40
「その一言で」（放送センター）・・・・・・・・・・44
「赤線拾い」（鳥越正克）・・・・・・・・・・・・・48
「お役に立つ人になります」（原田恵一郎）・・・52

武史は言った…。

「母さん、オッオレ…、結婚したい人がいるんだ」

息子の表情から「これは何かある」と感じた。

わたしの名前は松島和子。仙台から息子に会うため上京してきた。

「突然のことで、母さん驚いちゃった。武史にそんないい人がいたなんて、気付かなかったわ。でも～、あなたまだ学生でしょ」

武史は都内の大学に通う学生で、４回生。久しぶりの再会だった。

「それでどんな方なの」

「とってもいい人、年上なんだ」

「えっ、年上の方」

「そっ、そうなんだ…、バイト先で知り合ったんだけど…。付き合って2年になるかな…」

うつむいたまま、ポツリポツリと話し続ける武史に、私はどこか不安がぬぐいきれない。

「あなたも就職が決まって、母さんもやれやれって、ホッとしたとこなのよ」

「うん、分かってる」

「相手のご両親は、そのことご存じなの」

「彼女の親もＯＫしてくれてる。向こうの両親にも会ってほしいんだ」

すでに、話が随分進んでいることに、改めて驚かされる。そして、武史の思い詰めた気持ちもひしひしと伝わってくるのだった。

「母さん、実は…」

「何？　まだ、ほかにあるの？」

「実は彼女、一度結婚していて、子どもが２人いるんだ」

来たっ！　と思った。そして必死に冷静を装った。

「２人お子さんがいらっしゃるの？」

「７歳と５歳」

武史が顔を上げられない原因はこれだったのかと、すべてを聞かされた私は心臓の高鳴りを抑えることができなかった。そして長い沈黙。

（…結婚となれば、息子は一家を支える大黒柱。ところが、その息子はまだ学生。おまけに、お相手にはお子さんまで…、大丈夫かなぁ…）

考えれば考えるほど不安が広がる。

その時だった、私の脳裏に、いつも離れぬあの人の姿がまた浮かび上がってきたのだった。

あれは戦争中のこと。当時２歳だった私は、疎開先で疫痢にかかり、命を失いかけた。薬も何もない中、看護士だった母は、手元にあった蒸留水を弱り果てたわたしの口に何度も含ませ、それで助かったという。

「あの時は、お水に『金光さま』とお祈りしながら、お前に与えたんだよ。それで命のおかげを頂いたんだよ」と、よく聞かされた。

「あぁ、お母さんの祈りって、何てありがたいんだろう」と、何度聞いても深い愛情を感じたのだった。

こんなこともあった。

次男の武史を出産した翌年、36歳のわたしに乳がんが見つかった。それまでも、慢性腎炎で何度も入退院を繰り返していたが、追い打ちをかけるようながんの宣告。

「どうしてわたしだけこんな目に…」と、つい母に泣き言を言った。

すると「そんな、わたしだけ、なんて思ったって駄目なんだよ。これは現実にちゃんと起きていることなんだから、しっかり受け止めて…、神様に命のおかげを頂くようにお願いしないと、強い気持ちでいないと助からないんだよ」と、祈るように語りかけてくれた。

「あんた、あの子たちを何としてでも育てなきゃいけないんだよ。2人の子どもを残して死ねないんだよ」。そう言ってずっと手を握ってくれた。

その時の手の温もりが、鮮明に思い出される。あの時、余命1年と言われたわたしもすでに54歳になっていた。

とにかく、いつも母に助けられながら暮らしてきた。母への、ありがたくて忘れることができない恩が、いつも心の底にある。

その母も、突然、脳溢血でこの世を去った。69歳。何一つ恩返しのできないまま。

（…お母さん…）

いつも脳裏に思い浮かぶ母。わたしが1歳半の時に父親が再婚して、母となった人。父親の開業して

いる小児科で働いていた看護師だった。
わたしは、その人にとても可愛がって育てられた。弟や妹が生まれてからも、何はさておき、わが子よりもわたしを先にというほどだった。
「わたしも母さんに育ててもらったんだ。武史にもできないはずはない。いや、きっと母さんも喜んでくれる。育ててもらった母さんへの恩返しを武史もしてくれる。ひょっとすると、神様がそうさせておられるのかも…」
聞くと、すでに武史は幼稚園の送り迎えも手伝ったりして、子どもたちとも、とてもうまくいっているという。
「武史…」
「なに？　母さん…」
「これは、神様から頂いた特別なご縁かもしれないって、母さん思えてきたわ…」
「どういうこと、母さん」
「とにかく、幸せにならなくっちゃね、武史。これから大変よ。２人のお父さんなんだから。しっかりやんなさいよ。母さんも応援するわ」
「ありがとう。オレ、頑張るよ」
あれから15年。久しぶりに仙台へ里帰りした息子たちと歩く、青葉城公園。
（…神様のおかげって、本当にありがたいなあ…）
言葉にならない喜びが、わたしの中から自然とあふれ出てくる。

「ばあちゃん、石垣が立派だね」

「そうなの、青葉城は石垣が有名なのよ」

すっかり青年になった孫の笑顔に、つい釣られる。

その時、またも母のことが思い出された。

「あんた、あの子たちを何としてでも育てなきゃいけないんだよ」

あれは、再婚した時の母の心そのものだったのではないか…。今にして気付く、母の心。

わたしもすでに、亡くなった母と同じ年になっていた。

孫と見上げる高い石垣。その先には澄み渡った空が広がる。

その吸い込まれそうな空に、わたしの心がとけていく。

ほおに一筋の涙が伝った。

「お母さんありがとう」

心のよりどころ

金光教放送センター

「どうしてこういうことになるんだろう。これからどうしていったらいいんだろう」

岡山市に住む河本博志（こうもと・ひろし）さんは今から5年前、47歳の時にどうにもならない問題を抱え込んで、窮地に陥っていました。

博志さんの人生は、47歳のその時まではおおむね順風満帆でした。ただ一度、小学校6年生の時に心臓の検査入院をしましたが、精密検査の結果は異常なしでした。その時、実は、彼の両親とおばあさんが金光教の教会へ参拝し「博志が無事でありますように」と教会の先生と共に一心に神様にお願いしていたのでした。

博志さんはそのことを聞いていて、子ども心に恩を感じていたので、ずっと教会へお参りしていました。その後、学校を出て就職、そして結婚。3人の子どもさんにも恵まれ、その子どもたちも順調に成長して、とても幸せな暮らしぶりでした。また、博志さんのお父さん、お母さんも元気な上に、おばあさんも健在で、8人家族という、最近では珍しい大家族で仲良く暮らしていたのです。毎日がありがたくて、毎週日曜日には教会へ親子でお参りし、神様にお礼申していました。

ところが、幸せな日常も流れるように続いていくと、ありがたさが薄れてしまうのでしょうか。何事もなく暮らしていけることが、つい当たり前になってしまい、次第に教会から足が遠のいていったので

す。それからしばらくたって、博志さんの職場が大変な時期を迎えました。

博志さんは信用金庫で働いていましたが、ついには破綻（はたん）となり、職を失うこととなりました。また、時を同じくして、小学生の次男が朝になると決まってお腹が痛いと訴え、学校に行けなくなったのです。さらに博志さんのお母さんが交通事故に遭い、入院ということになりました。そのうえ、95歳のおばあさんは、介護のため施設に預かってもらっていましたが、どうしても家に帰りたいと博志さんに訴えます。

「どうして、こういうことになるんだろう。いったい、これからどうしたらいいんだろう」

博志さんは自分の仕事のことだけでも精いっぱいなのに、矢継ぎ早に、次々と家族の問題が押し寄せてきて、何をどうしたらいいのか、もう分からなくなってしまいました。途方に暮れていた博志さんが向かった先は、10年ほど足が遠のいていた教会でした。

「先生、助けてください」と藁（わら）をもつかむ思いの一言から始まって、その後は何をどのように話したのか覚えてないほどに、教会の先生に、たまりにたまったものを聞いてもらっていました。先生は、いつ終わるともしれない博志さんの話を、じっと、また包み込むように聞いてくれました。そして博志さんが話し終えたのは、夜もかなり更けたころでした。その時の博志さんは、話を聞いてもらえた満足感と教会へ久しぶりに参拝できた安心感で、

少し和らいだ気持ちで家に帰っていきました。

その翌日からは、毎日、教会参拝を続けました。先生から、「一心にお願いしなさい。そして、少しでも喜べることを探して、見つかれば、それを風船のように膨らませていきましょう」との教えを頂きました。たくさんの問題を抱えている博志さんでしたが、一つひとつ教会の先生に話を聞いてもらって、先生が神様にお願いしてくださることで勇気づけられ、前向きに取り組むことができてきました。すると、不思議と問題も解決へ向かっていくのです。

まず、お母さんの交通事故ですが、実は大変なおかげを受けていたのです。車が大破した大きな事故で、一つ間違えば命を失ってもおかしくないくらいだったのに、軽い打撲で済み、わずか一カ月で退院することができました。そして、母親の退院後、おばあさんも本人の願い通りに施設から出ることがかない、在宅ケアをすることになりました。

その際、不登校だった子どもが、進んでおばあさんのお世話をするのです。博志さんは、大変びっくりしました。学校に行けないというマイナス面ばかり見ていたのに、優しくて思いやりのある子に育っていたことを忘れていた、そのことを喜ばないと、と反省させられました。それからは、できるだけ子どもと向き合っていろいろと話をするように努め、一緒に教会参拝もできるようになりました。すると少しずつですが、学校へも行けるようになったのです。

さらに、博志さんの再就職先も見つかりました。

それは、以前の仕事とは全く違った業務内容で、人間関係も難しい職場でした。博志さんは仕事が終わると毎日教会へ参拝し、先生に職場のことを一つ一つ話をして、神様にしっかりお願いして取り組んでいきました。すると、最初はぎくしゃくしていた職場の人間関係も、段々スムーズになってきたのです。

教会の先生は、博志さん自体が変わってきたのだと言います。博志さんは自分のことだけでなく、家族一人ひとりのこと、職場の人のこともお願いするようになりました。すると、「神様が見守ってくれている、教会の先生が祈ってくれている」という安堵（あんど）感もあり、どんなことにもくじけない強い心で取り組めるように変わっていったのです。

今、博志さんは5年前のどうにもならない状況を振り返ってみて「あの時、教会があって本当に良かった」と感慨深げに話します。博志さんにとって、教会はなくてはならない大切な場所であり、心のよりどころとなっています。

今日も、博志さんは元気に職場へ向かい、仕事が終わると欠かさず教会へ参拝し、少しでもお役に立つ生き方を目指しています。

信心ライブ「私が彼に惹かれた理由」

金光教放送センター

金光教の集会で行われた発表や講話などを録音でご紹介する『信心ライブ』。今日は、神戸市の豊原慶子さんが『青年の集い』で発表されたお話を、ごく一部ですが、お聞き頂きましょう。

◇（以下、豊原さんのお話）

そして、その会社で主人と出会いました。これが私と金光教との初めての出会いでした。

ここからはちょっと恥ずかしいんですけれども、彼に惹（ひ）かれた理由をお話しさせて頂きます。

主人のことを「この人すごいなあ」と思ったのは、まず、人が嫌がることをとにかく率先してやるんですね。重たいものは自分が持つ。ゴミが落ちていたら、そっと拾ってゴミ箱に捨てる。とにかく人の見えないところでさりげなくするその行動が、「へーえ、この人すごいな」というふうに思わせてもらいました。

今までは「これ、やってやったぞ」と言う人にはいくらでも出会ったんですけれども、人の見えないところをやって、黙っているという人に出会ったのは初めてでした。それで、「この人、いい人やな」と思ったのと同時に、「この人をこんなにいい人にしたのは何やろな」というのも同時に思いました。

先輩であった彼は、私がやっぱり慣れないことや不安なことがあって思い詰めていると、「いくら体が元気で働いていても、心が元気じゃなかったらあ

かんねんで」と、一言ポツッと言ってくれました。私はその言葉を聞いて、これは私の価値観を大きく変えてくれる一言でした。

ご縁を頂いてお付き合いをするようになってしばらくして、実家から通っていた彼が「うちに来る？」と言ってくれたので、遊びに行かせてもらうことにしました。ケーキを買って神戸に向かい、「ここやでー」と言うのでフッと見ると、「金光教」という看板が出ていました。「え、何かされているの？」と聞くと、「うち教会やねん」と、サラッと言うんです。彼は別に隠しているつもりはなかったらしいんですけれども、会社のみんなが知っているから、当然私も知っているだろうと思い込んでいたみたいです。

今でもこういうことがよくありまして、自分は言ったつもりが言っていなかったということが、ちょっとよく夫婦間でもあるんですけれども、この時も一番重要なことを聞いていなかったんですね。

それでも初めて教会にお邪魔した時は、ほんとに家族、今、教会家族、あの、おばあちゃんも当時はいまして、みんなで迎えてくれました。たまたまその時、嫁いでいた義理の姉も遊びに来ていました。私は不思議とその雰囲気がとても心地良くて、玄関で迎えてくれた義母の笑顔を、今でもはっきりと思い出します。

結婚する相手と巡り会ったら、よくビビッとくるって言いますけれども、私は彼には感じなかったんですけれども、その家族の雰囲気に囲まれながら、

「ああ、私この家に来るかなあ」ということを不思議と感じていました。

そしてまた、主人はといえば、その日にちょうど地区の寄り合いがあるからと言って、私を家族に紹介してしばらくすると、私を置いて寄り合いに行ってしまいました。今でも、何でそんな日に私を誘ったんかな、というのは不思議なんですけれども。それからは、私と家族とでいろんな話をしました。私が彼の会社でのあり方をお話ししたり、彼の小さい時の話をしたり、ほんとに話が盛り上がってとても楽しかったです。

しかし、待っても待っても、主人は帰って来ないんですね。それで結局、遅くに京都まで一人で帰らすわけにはいかないということで、教会の家族の計らいで、その日は教会に泊めて頂くことになりました。しばらく私も一人暮らしをしていましたので、私はほんとに温かい雰囲気を久しぶりに味わわせて頂きました。

それからは2人の会話の中でも、自然と教会のことを聞いたりですとか、いろんなことを聞く機会が増えたんですけれども、私は何よりそれで感動したことは、彼がサラッといつも「お願いしとくわ」と言ってくれるんですね。そのさりげない彼の言葉なんですけれども、私たちの普通の一般の生活でしたら、元旦に神社に行って…年頭のお願いですね、自分のこととか、まあせいぜい家族のことをお願いしますけれども、人様からお願いをしてもらえる、祈ってもらえるということが初めての感覚でした。

今日もこういう発表するということで、教会家族も主人も祈ってくれていると思うんですけれども、そのことがですね、やはり祈られることが当たり前ではない人間からしたら、ほんとに大きな心の支えになるんです。ですからまた、余計にそこで「この人いい人やなあ」ということで、「お願いしとくわ」と言われる度に、「ええ人やなあ」と思って惹かれていきました。そしてご縁を頂いて、結婚することになりました。（ここまで、豊原さんのお話）

◇

金光教のことをまったく知らなかった豊原さんですが、こうしてご主人に出会われたことから、教会に嫁がれることになり、現在は会社を辞めて、ご主人と共に金光教の布教に携わっています。

豊原さんが最初に感じたご主人の魅力は、人に対するさりげない思いやりでした。そしてこれが、信心のある温かい家庭の中で培われたことを、ご家族に出会った時に直感されたのでした。

金光教には、こういう教えがあります。

「自分のことは次にして、人の助かることを先にお願いせよ。そうすると、自分のことは神がよいようにしてくださる」。

「人の役に立ちたい」という気持ちは誰にでもありますが、どこかで見返りを期待する心が働いてしまうのでしょう。つい恩に着せたり、人が見ていないと損をしたような気持ちになったりしがちです。けれども、「神様がよいようにしてくださる」という絶対の信頼と安心感が、人間の優しさをしっかり

と支えてくれるのです。

「体だけじゃなく、心も元気でなければ」というご主人の言葉がありました。この“心の元気さ”も、神様に守られているという実感から来るのでしょう。

今日一日、私たちも、元気な心で過ごしたいですね。

吉野山踏み迷うても花の中

渕上忠保

皆さんおはようございます。

私は中学生の時、父の会社が倒産し、生活が一変しました。

それ以来、「幸せとは何か」と求め続け、後に金光教と出合い、金光教の教師となりました。

私は、どういう出来事も、すべて、人間を幸せへと導こうとされる、神様のお働きの中にあることだと教えて頂いています。ですから、「そこに込められた神様のお心は何だろう。このことを通して、神様は私に、何を伝えようとしておられるのだろう」とアンテナを立てて、成り行きを見ていきます。

これは私が36歳の時のことです。

ブラジルでの金光教の祭典に旅立つ3日前、実家の母から、入院中の父が危篤だという電話が入りました。私は神様に、父のことをお願いしながら「このまま死ぬんだろうか」と、騒ぐ気持ちを鎮める一方で、さあブラジルに行くべきか留まるべきか、葛藤（かっとう）しながら「神様、教えてください」と祈りました。そしたら、その夜、夢を見たんです。

私が師と仰ぐ教会の先生から、「渕上、ブラジルに行くぞ」と声をかけられ「ハイ」っと返事をした、その自分の声で目が覚めたんです。それで「父のことは神様にお任せして、ブラジルに行かせて頂こう」という思いになりました。

その日の夜、私は父の病院に駆けつけました。

父は、意識不明の状態でした。私は父の手を取り、「忠保です。今帰ってきたよ」と声を掛けると、もう間髪を入れずでした。なんと、父の意識が戻ったんです。そして開口一番、「ブラジルに行くのは25日からやったかね」と言ったんです。私は呆気（あっけ）に取られたまま、「いいや、明日、出発するよ」と答えていました。すると今度は、「気を付けて行ってこんばたい」と言うと、すっと、また意識が無くなりました。

もう雷に打たれたような感じで、「自分が生死をさまよっているのに、子どものことを気に掛けている。これが親というものか」と、もう胸がいっぱいになりました。私は、これが最後になるかもしれないと思い、父の体をさすりながら、ハッとしたんです。さっきの父の言葉は、そのまま神様の言葉なん

だと思えたんです。その時はっきり、ブラジルに行く決心がつきました。

母や兄弟は引き留めましたが、私の気持ちを分かって、送り出してくれました。

道中はずっと、父のことを祈りながらの旅でしたが、飛行機がブラジル上空に差し掛かった時、私の耳元で、日本にいる6歳になる娘の「お父さーん」と叫ぶ声が聞こえた気がしたんです。その瞬間、虫の知らせというか、今、父が亡くなったなと感じました。空港に着いて実家に電話を入れると、その時刻に亡くなった、ということでした。

それで、師匠が書いた本を出して、神様に祈りを込め、父のことを念じながら開くと、2つの言葉が目に飛び込んできて、胸が熱くなりました。

一つは、「吉野山踏み迷うても花の中」という言葉でした。

吉野山は桜の名所で、たとえ道に迷っても満開の桜の素晴らしい世界の中だ、という意味です。ですから、神様が「お前の父は、そういう世界に行くのだから、心配しなくてもよい」と言ってくださっている感じがしたのです。

そしてもう一つは、「山は雪、麓（ふもと）はあられ、里は雨、いずこも同じ神の懐」という言葉です。それぞれの所で情景は違うけれども、どこも神の懐だ、というわけです。

わが家では、父の死で悲しんでいる。私はブラジルの旅の空。そして、教会では先生が祈ってくださっている。そのすべてが、皆等しく神様の懐の中に

あり、地球の反対側にいても時間、空間を超えて一つにつながっている、と感じたんです。

それですぐ、私は、このことを含めて母に手紙を書きました。

「母さん。親父（おやじ）との別れは悲しいでしょう。寂しいでしょう。もっと、生きて欲しかったという思いでしょう。けど、金光教では、『神は天地を一目に見ておる』『人間は、神様のおかげの中に生まれ、おかげの中で生活し、おかげの中で死んでいくのである』と教えられています。確かに、親父との別れは悲しいことだけど、そういう神様に抱かれている実感がして、感動で涙が止まりません。母さん、今書いたように、親父は安心に包まれた世界にいますからね。僕は今、親父が、自分の生命をかけて、子どもに、こういう世界を見せてくれたんだと、親父にお礼の気持ちでいっぱいです。親父の死は、僕の財産になります。今から、親父の御霊と一緒に、ブラジルの教会に参拝してきます」と、長い手紙を書きました。

その手紙を、母は亡くなるまで自分のバッグに入れ、大切にしていたそうです。私にとって、親父の死は今も私の中で輝いています。

たとえ、悲しいこと、辛い苦しいことの中にも、必ず、神様の思いが込められています。私も、お話したような神様の働きに触れなければ、ただ辛い悲しいだけで終っていたと思います。ですから、「このことに込められた神様のお心は何だろう」と、心に掛けていると、「これが神様の声であろうか、こ

れが神様の働きであろうか」ということに気付かされ、見守られていると感じる体験がきっと生まれる、と思うのです。

どうぞ皆さん、神様と共に幸せを感じる日々を過ごされますよう願っております。

井戸の掃除をするように

金光教放送センター

「信心というのは、井戸にたまった泥を掃除するようなものなんだ。中途半端でやめてはいけない。濁った水を辛抱強く、最後の最後までくみ出さなければ、奇麗な水にはならないからね」

これはもう30年以上も前、恵美子さんが、今は亡きお父さんから聞いた言葉です。その口ぶりは、もうすぐ嫁いでいく娘へのはなむけの言葉のようでもあり、お父さんが自分自身に言い聞かせているようでもありました。この言葉は年とともに重みを増し、今も恵美子さんを支え続けています。

恵美子さんは昭和28年、静岡市に生まれましたが、恵美子さんが5歳、妹が2歳の時、お母さんが

出産の事故で亡くなりました。

新しいお母さんがやってきたのは、それから1年後のことでした。よく働く人でしたが、激しい感情がすぐ言葉や態度に表れ、とくに子どもたちに対しては、何かにつけ厳しい言葉が浴びせられました。

今になって考えれば、当時の生活は貧しく、仕事や家事に明け暮れる中で、実の娘でもない手の掛かる子どもたちに、こまやかな愛情を注ぐ心の余裕などなかったのでしょう。

しかし、幼い子どもにそんな事情など分かるはずもなく、母親の言葉に、恵美子さんたち姉妹は深く傷つき、憎しみや恨みばかりが心の底に積み重なっていくのでした。

20歳の時、押さえ込んできた思いがついに爆発する出来事がありました。

トイレの掃除をしていた時のことです。「トイレ掃除をする時は、ああして、こうして…」と、前もってお母さんから細かく注意を受けていました。ところが恵美子さんは、「またいつものガミガミが始まった」と思って聞き流していたのです。

掃除の途中、いきなり後ろから怒鳴り声が響きました。

「何、そのやり方は！」

そして次の瞬間、パシッと頭を叩かれたのです。

「何するのよ！」と恵美子さんも反発して口げんかになり、その勢いで、妹と連れ立って、家を飛び出していったのでした。もう二度と帰らない覚悟でした。お父さんと別れる寂しさはありましたが、こ

のお母さんとは居られない、という思いの方がはるかに強かったのです。

家を出た2人は、同じ市内に住んでいた祖父の家に身を寄せ、以来そこで生活することになりました。

やがて祖父の勧めもあって、恵美子さんは金光教の教会に久しぶりにお参りするようになりました。実家でも時折、父に連れられてお参りしていたので、教会の先生は自分の生い立ちも、家出をした事情も、何もかもよくご存じです。お参りするたびに、温かいものに包まれるような安心感を覚えました。

そんなある日、先生から、思いも寄らない話を聞いたのです。

「昔、お母さんがあなたのことで、泣きながらお参りに来られたことがあったんだよ」

それは、耳を疑うような一言でした。詳しく聞いてみると、恵美子さんが小学4年生の時のことでした。

学校でふざけて遊んでいる時に、窓から転落して頭を打ち、入院したことがありました。病院のベッドに上がったまでは覚えていますが、気が付いた時にはもう3日が経過していました。

意識を失っていた3日間、脳にたまった血の塊を取り出す非常に難しい手術があり、その後も高熱が続いて、生死の境をさまよいました。その間、ずっと恵美子さんに付き添っていたのは、ほかでもない、あのお母さんだったのです。

そしていよいよ危ないという時、教会に飛び込んで来て、そこに祭られている実のお母さんの霊前に

ぬかずき、「あなたの大事な娘さんを預かっていながら、私が至らないばっかりに、こんな目に遭わせてしまいました。ごめんなさい」と、声を上げて泣きながら謝っていたというのです。そんないきさつの中で、恵美子さんは辛うじて一命を取り留め、意識を取り戻したのだということでした。

私につらく当たってばかりいたお母さんが、教会に参ったこともなかったお母さんが、私のために祈ってくれていた。

考えてみれば、5歳から20歳まで嫌なこともいろいろあったけれど、世話になり続けて、今、自分は生きている。そのことにお礼を言ったことが一度でもあっただろうか…。

それは、恵美子さんの心の奥に固くこびりついた長年のわだかまりが、じわりと溶け始めた瞬間でした。

恵美子さんは時折、用事を作って実家を訪れることにしました。しかし、お母さんは、こちらの気持ちをなかなか素直に受け止めてはくれません。「何をしに来た！」という、とげとげしい態度に、また心が冷え固まることもありました。

結婚してからも、正月やお盆など、折に触れて子どもを連れて里帰りしていますが、30年以上たった今でさえ、お母さんのよそよそしさは変わりません。それほどに、お母さんが受けた心の傷も深いのでしょう。

お母さんは晩年のお父さんを、一人で献身的に介護してくれていました。そのことへの感謝も込めて、

もっともっと、優しく接していきたいと思う一方で、つらかった子ども時代を思い出すと、恨みがましい気持ちがまた、わき起こることもあります。

そんな時、恵美子さんはお父さんの言葉をもう一度かみしめるのです。

「信心は井戸にたまった泥を掃除するようなものだ。奇麗な水になるまであきらめず、辛抱強くくみ出すんだ」

教会に足繁くお参りしていたお父さんは、自分の心の泥ばかりか、家族みんなの不満までも黙って吸い取って、神様のところに運んでくれていたのでしょう。

恵美子さんは、そんなお父さんの生き方を、しっかりと受け継いでいきたいと願っています。

寮母さんは大忙し

金光教放送センター

原恵子さんは今、62歳。ある病院の寮母をして、今年で13年になります。

仕事は、主に寮の掃除です。寮には看護師さん、看護助手さんなどがいますが、原さんは「人の命を預かる病院でのお仕事がうまくいきますよう、居心地の良い寮でありますように」と願いつつ、心を込めてお掃除をします。

時には、さまざまな相談にも乗るからでしょうか、寮にいた看護師さんの結婚式に呼ばれることもあって、「寮母さん、スピーチもお願いしますね」なんて言われるととても大変なんですが、それでもうれしい気持ちでいっぱいになるそうです。

原さんが大切にしている色紙があります。それは、看護学校の人たちからのものです。彼女たちは、いわば看護師の卵。看護の勉強の傍ら、実習のため病院に来ます。その人たちに臨時で寮を使ってもらうのですが、せめて家に居て、くつろぐような気持ちになってもらおうと、大きな声で「おはよう、頑張ろうね」「お帰り、今日も一日お疲れさま」と声を掛け、積極的に話を聞くようにしていました。

すると、次第に彼女たちは、「今日患者さんとうまく話しができなかった」「先輩にしかられちゃったわ」というような悩みも打ち明けてくれるようになってきたのです。「寮母さん」と言っていたのがだんだん「原さん、原さん」と言ってくれるようにもなりました。そして実習が終わった時には、写真と共に「あなたの言葉に癒されました」「お世話になりました。ありがとう」などと、たくさんのメッセージを書いて渡してくれたのです。

「こんな触れ合いが頂ける、今の仕事がうれしくてありがたくて」と言う原さんですが、彼女にとって天職とも言えるこのお仕事を頂いたのは50歳の時、最愛のご主人との別れを乗り越えてのことでした。「神様の大きなお働きがあってこそ、ここまで来れたのです」と、原さんは語り始めました。

原さんの故郷は、愛媛県。昭和23年生まれ、いわゆる団塊の世代です。

都会にあこがれ、18歳の時、神戸で大きなパン屋さんに就職しました。やがて、ケーキ職人のご主人と結婚し、2人の子どもにも恵まれました。幸せな

日々でした。夫婦で一生懸命働いて、駅前に小さなお菓子屋さんも出すことができました。お店も繁盛し、順風満帆。

ところが、お店を持って4年目、原さん40歳の時、ご主人が肺がんにかかっていることが分かったのです。それも、手術すらできないという状態でした。

途方に暮れた原さんは、故郷のお母さんに「助けて。どうしたらいいの」と、悲痛な電話を掛けました。それに対して、お母さんは「西川先生が、大阪の藤井寺教会におられる。そこにすぐ行きなさい」と、こう言ったのです。

お母さんは、熱心な金光教の信者でした。そのお母さんが一番信頼している先生が、今は大阪で布教しておられるというのです。金光教の教会には、お母さんについて何度かお参りしただけの原さんでしたが、矢も盾もたまらず、ご主人と共に電車を乗り継いで藤井寺教会に向かいました。

先生は2人の話を聞いて、「大丈夫。心配することはないですよ」と言ってくださいました。心強い気持ちが広がりました。ご主人は、お話の一つひとつをしっかりとかみしめて聞き、その帰りには、「いい先生に出会えて良かったな」と原さんに言ったのです。先生と出会うことで、病気と闘う勇気がわいてきたのでした。

その後も、ご主人の体を気遣いながらではありますが、2人は何度も教会に足を運び、先生のお話を聞きました、そのお話を通して、ご主人は自分を生かしてくださっている神様のお働きに気付き、一日

の終わりに、「今日も一日ありがとうございました」と命のお礼を欠かさなくなりました。

最終的には、がんの転移は食い止められなかったのですが、それでも治療を進めるうちに手術もできるほどに体力も戻りました。手術後、小康状態も得てもう一度家に帰り、お店に立ってケーキを焼くこともできました。

家族にとって愛する人が病に苦しむ姿を見るほど、悲しいつらいことはありません。しかし、ご主人は、まるで横に神様がついていてくださるから安心とでも言うように、穏やかにみんなのことを気遣いつつ、亡くなったのです。実家の母は、「心が助かったんだよね、神様のおかげを頂いたんだよね」と言いましたが、そのご主人の姿に何より家族の心が助かったのです。

その後、高校生と中学生の娘を抱え、原さんは会社勤めを始めました。ところが、その会社の経営が行き詰まり、仕事が無くなるかもしれないと思った時、「あなたにぴったりな仕事がある」と、この寮母の仕事を紹介してもらったのです。「神様が働いてくださった」と言わずにはおれないほどの、見事なタイミングでした。

それから13年の月日がたちました。時代の流れか、初めは40人ほどもいた寮生も、今や3人。だから、定年の時には退職を言い渡されるかと覚悟していたのに、仕事を続けることができました。

その代わり、寮以外に、院長室など掃除の範囲がずいぶん増えたのですが、「お母さん、この時世に

仕事が増えるなんてありがたいことだよ」という娘さんの言葉に背中を押されながら、「神様、今日も人のお役に立つ仕事ができますように」と願いつつ原さんは、家を後にするのでした。

祈りには必ずおかげがつく

金光教放送センター

岡山県総社市にお住まいの平田耕一さん・78歳は、3年ほど前から、心の中でふと思うことをそのままノートに書き留めています。人間には、神様が心を授けてくださっている。その心がふと思うことを大切にしたい、と思ったのです。平田さんは、それに『ふと思う記』と名付け、今ではもう4冊目になります。

このノートのあるページに、「祈りには必ずおかげがつく」という言葉があります。

今少し、平田さんの人生をさかのぼってみます。

平田さんのお母さんは終戦後、ご主人を残して、一足先に満州から引き揚げてきました。当時12歳の

平田さんを頭に、わんぱく盛りの子ども5人を連れ、幾度も生死の境をくぐりぬけて帰国し、総社に住む身寄りを頼ったのですが、何しろ母子6人もの家族です。厄介になるわけにもいかず、ほかに頼れる当てもなく途方に暮れてしまいました。

そんな時、ふと神様のことが思い出されました。お母さんは満州に居た時、金光教の教会にお参りしていました。すぐさま総社にある教会に駆け込み、先生に事情を話し、たまらぬ思いをぶちまけました。

先生は、お母さんの話をじっと聞いてくださいました。これからの生活のことにも相談に乗ってくださり、昼間は子どもを教会で預かってもらい、反物の行商に出ることになりました。先が見えない不安でいっぱいだったお母さんには、初めて一筋の明るい光が差し込んできたような思いでした。

それからのお母さんは、毎日、教会にお参りしてから行商に行き、仕事を終えると、どんなに遅くなってもまた教会にお参りして、その日のことを報告して、お礼を言います。食うや食わずの生活ながらも、おかげで何とか日々の生計が立つようになってきました。

「教会へお参りしてから商売に行ったら、必ずもうかる」と、お母さんは言っていました。

そんなお母さんに連れ立って、平田さんも、時々お参りしていました。お参りしてから商売に行くともうかるのなら、自分もお参りして応援しよう。自分たち子どものために苦労して一生懸命に働くお母さんを見て、長男である自分も、何か手助けをした

い思いでいっぱいでした。何より、教会へお参りすると、「よう参った、よう参った」と、お母さんはものすごく喜ぶ。そのことが、子ども心にとてもうれしかったのです。

そんな事情ですから、平田さんは中学校を卒業したらすぐ働くつもりでいましたが、教会の先生は「小さい望みには小さいおかげしか現れない。大きな望みを持って、一心に神様に縋（すが）っていけば、やがて大きなおかげを頂けるから、小さい心を出すなよ」と励ましてくださり、親子共にその気になり、平田さんは、高校、大学へと進み、やがて中学校の教員となりました。

しかし、勤める学校は荒れに荒れていました。夜中に学校に来て、天井裏に上がってたばこを吸う生徒がおり、たばこの火が原因で、ボヤが出たこともありました。集団でほかの学校へ殴りこむ事件など、次々と問題は後を絶ちません。

平田さんは、いつしかお母さんと同じように、学校へ行く時には、必ず教会へお参りしていました。起こってくる問題にどう対処したらいいのか、生徒にどう指導したらいいのか分からない。分からないながらもじっとしてはおれなくて、神様に祈らざるを得なかったのです。

教会の先生にお話しすると、「何もせんでよろしい」と言われました。自分で何とかしなければと、追い詰められ、せき立てられていた平田さんに、「自分だけで何かしようと思わず、しっかりと神様にお願いをしてから、事に当たるように。小手先で解決

しようとするなよ」という願いのこもった言葉でした。

結局、何か特別なことをしたからこうなったと言えるようなことはありませんでしたが、事が起こる度に、神様に縋りながら問題に向き合うことで、何とか通り抜けてきました。そういう毎日の積み重ねで、気がつけば36年間、定年を迎えるまで一日も休むことなく勤めあげることができたのでした。

平田さんは、「お参りしてから商売に行ったら、必ずもうかる」というお母さんの言葉を思い出します。自分も同じように、お参りしてから仕事に出掛けるようになりましたが、お母さんのように、そうすると必ずおかげが頂けるという強い信念を持っていたわけではありません。しかし、祈り続けたことで、辛抱する力、耐える力、やりぬく力、そういった力を神様から頂いたと、今さらながら思います。

お母さんが、足にたこができても、まめができても、疲れた重い足を引きずりながら反物を背負って、朝早くから夜遅くまで山坂を越えて行商して回った。あの頑張りはどこから出てきたのだろうか。

今になって振り返ってみると、教会に参拝して、先生の励ましに力付けられ、共に祈ってくださっていることの安心感が、お母さんの強い支えになっていました。たとえ、たくさん売れなくても一つ高い物が売れたり、何も売れなくても野菜などの食べ物をもらって帰ることができたりと、一つひとつのことが神様のおかげと、お母さんは感じていました。

「祈りには必ずおかげがつく」という信念をもっ

てのお母さんの生き様に思いをはせながら、今の自分は、お母さんのこの姿に支えられてきたのだと思うのです。

そんな思いを乗せて、平田さんは『ふと思う記』のページに、「私の人生は築き上げた人生ではなかった。こうなっていた人生。母の信心が、いつも私の人生に付きまとってくれていたように思う」とつづるのでした。

千五百キロ離れていても

金光教放送センター

時は、冬。場所は、北海道。今から12年前のことです。ゲレンデの上級者コースで、愛さんはある男性とぶつかって転びました。彼女の友人たちはその男性を取り囲み、「食事ぐらいはおごってもらわないと」と、冗談混じりに2人の劇的な出会いを祝福してくれました。

彼女は彼と交際するようになり、やがて結婚へと至ったのです。愛さんは当時、大阪で薬剤師として勤め、何事にも積極的なアウトドア派の女性でした。

北海道に嫁いで行く時、その心の中には、どんな家庭を作っていくか、どんなふうに妻として、主婦として、一人の社会人として生きていくか、そんな

未来図が、希望いっぱいに描かれていたはずです。ところが……

初めは、ひどい肌荒れぐらいにしか思いませんでした。体のあちこちの皮膚が痛むのです。車に乗ればシートの冷たさがこたえ、お尻の皮がごわごわします。服を着れば縫い目が痛く、そのうち、タオルケットを巻いて寝るようになりました。やけどしたようなあとが顔にまで広がり、仕事も続けられなくなりました。のどの粘膜も痛み、「いつ気道が締まってしまうか」と、恐怖を感じながら毎日を過ごすようになりました。ついには、最低限の用事をする以外、寝て過ごすような生活になりました。

全身アトピーと、化学物質過敏症という診断でした。気候の変化による免疫反応の異常。まるで、北海道という土地全体が、愛さんを拒否しているかのようでした。結局、愛さんは、痛くて不安で思い通りにならない3年間を北海道で過ごした後、ご主人と相談して、いったん1人で大阪に戻ることになりました。

大阪に戻ると、病気はだんだん良くなり、やがて、ほとんど元通りの健康を取り戻しました。しかし、体は楽になっても、心は苦しみに沈む毎日でした。愛する人と良い家庭を築くどころか、そばにいることもできない自分なのです。幸い、ご主人もそのご両親も、愛さんを責めることなく、優しく見守ってくれています。

しかし、愛さん自身としては、どうしようもないほどつらく、情けないのです。

「いったい私は、何のために生きているのか」

その思いが来る日も来る日も胸の中を駆け巡り、耐えきれなくなりました。そして、愛さんは、いつもお参りしている教会の先生に、その苦しみを打ち明けたのです。

教会の先生は、愛さんを慰め、それから、こう言いました。「みんな、役目を授かっている。立ち行くように、お願いさせてもらいましょう」。

それは、何度も聞いてきた言葉でした。しかし、この時の言葉は、神様が愛さんのために先生の口を借りて、改めて授けてくれた言葉であると、なぜか信じることができたのです。

愛さんは、考えました。「私の役目って、何だろう。私の役目って、何だろう」。愛さんは、今の自分にできることを、求めていくようになりました。そして、まずは、社会復帰を目指し、大阪で仕事を再開したのです。

次に、ご主人に思いを打ち明けました。「やっぱり、私たちの子どもが欲しい。駄目なら、私たちの子でなくても、育てるお役を授かりたい。その子にいい生き方を、生きることの素晴らしさを、伝えていきたい」。それは、すでに40歳となっていた愛さんの、精一杯の願いでした。

ご主人は、優しくうなずくと、「もしも子どもを授からなかったら、恵まれない子どもたちを支援する活動をするのもいいね」と言ってくれました。

２人は、願いを新たにして、平成14年の元旦に、金光教本部に参拝しました。２人に男の子が授かっ

たのは、その年の秋のことでした。

今、愛さんは、息子さんと一緒に大阪に住んでいます。愛さんが北海道に行けるのは年に1度ぐらいですが、ご主人は年に何度も大阪に来てくれます。今すぐには一緒に生活できないのは寂しいですし、申し訳ないことですが、健康に育ってくれている息子を見ると、こんな夫婦のあり方、こんな幸せのあり方もあっていいのでは、と思えます。

最近、愛さんの叔父さんが、大阪で入院しました。その叔父さんは、もともと目が不自由な人なのですが、今度は転倒して頭を打ち、脊椎（せきつい）も痛めてしまいました。再び自力で歩くことは難しいでしょう。お年を召してこんなことになり、まことに気の毒な状態です。

愛さんの息子さんは、わずかな面会時間で少しでも喜んでもらおうと、歌を歌って録音しては、それを病院に届けたりしています。そんな息子さんの姿を見て、あるいは、だれに言われるでもなく神棚に手を合わせて叔父さんの回復を祈る息子さんを見て、この子には、信心を通じて人として大切なことを伝えることができているのかな、と喜びがあふれてきます。

自分の生きる道をふさがれてしまったら、人はどうするでしょうか。愛さんは、まさに生きようとした道を閉ざされてしまったのでした。しかし、その時、今の自分にできることは何かという方向に向きを変え、「こんな自分が世のお役に立てる道を見付けたい」と願うところから、道が開けていったので

した。

それにしても、愛さんは良いご主人と、良いご家族に恵まれたな、と思わずにはいられません。そこにも、神様のお恵みが現れているように思えてならないのです。

心イキイキ、デザイン キラキラ！

今北紘一

私の仕事は、グラフィックデザイン。これは、文字や絵などを用いて、人と人、人とモノのコミュニケーションをスムーズにするものです。具体的には、ポスターや冊子、パッケージ、ディスプレイ、サイン、ＷＥＢ（ウェブ）など、広い範囲のデザインを指します。このようなデザインを通して、２つのかかわりの中で感じていることをお話してみたいと思います。

１つ目のかかわりとして、私が所属している日本グラフィックデザイナー協会があります。この協会は、グラフィックデザインを通して文化や産業の向上、発展に貢献することを目的とし、事業は、展覧

会、講演会、刊行物の発行や、国際交流などがあります。

ある時、パリにある国連のＵＮＥＳＣＯ（ユネスコ）による、シンボルマーク世界公募の記事が目に留まりました。

これは、一人でも多くの人が文字の読み書きをできるようにする運動によるものでした。

20年前当時、世界人口約50億のうち1／5の10億人が、文字の読み書きができないという状況でした。特に、発展途上国のアフリカなどを中心とした国々では、文字が読めないため、母親が農薬をミルクと間違え、赤ん坊に飲ませて死亡させる事件が、後を絶たないということでした。そのため、これらの人々に対し、国連が学校施設をつくり、教師の派遣や教科書を与えていこうとするものです。

私は、このような大きな問題は若いころは「とても手に負えない」とすぐあきらめておりましたし、また、先人の優れた言葉に対しても無関心の態度が多かったように思います。しかし、「自分にできることから始めなければ、世界は助からない」と、その時、俄然（がぜん）奮起し、即、教会にお参りして「お役に立ちますように…」と願いを立て、デザインに着手しました。

デザインの考え方は、どこの国の人々が見ても、一目瞭然に理解できるものであることが大切です。これを基本に、自宅や通勤途上でいろいろ、ああでもない、こうでもないとイメージを巡らせ、50点ばかりのスケッチをしたでしょうか？　最後に3点に

しぼり応募いたしました。

その後しばらくして、パリから電話の連絡が入りました。意外にもマークがグランプリに入ったとのこと。思わず、「ワー、本当～？」と心の中で歓声をあげました。

この作品は本を読んでいる人を真ん中に配置し、その両側を国連旗にもあるオリーブの枝が囲むデザインです。一夜明け、全国紙の「この人」の欄に、顔写真と共に堂々と掲載され、思わずうれし涙があふれ出てきたことを覚えています。

その後、このマークは、２０００年までの10年間、発展途上国や先進諸国の国々で、政府書類、切手などに使用されていました。小さなシンボルマークがこんな大きな運動に貢献させて頂いたとは、まさに10億の人々に文字の読み書きができるように一歩前進、国際貢献をさせて頂いたのだなあと、改めて感動を覚え、感謝せずにおられませんでした。

２つ目のかかわりは、滋賀県内の芸術系大学であります。

私は、この大学で講師として基礎デザインを教えています。その一つ「自分のシンボルマークのデザイン」という実習課題があります。考え方をしっかり立てさせ、ラフスケッチは１００個以上。学生の中には、中々思うようにアイデアが浮かばず、不安と焦りが先立ち、落ち込む者が少なからずあります。

私も含め、えてして人は、過去の体験については、スイスイと事が運ぶことが多いようですが、初めてのことについては悪戦苦闘の末、壁にぶち当たる傾

向にあります。私はこんな時、教会に参拝し、先生にアドバイスを頂くと、不思議と事が運ぶのです。

同時に、金光教には「信心は日々の改まりが第一である。毎日、元日の心で暮らし、日が暮れたら大晦日と思い、夜が明けたら元日と思って、日々うれしく暮らせば家庭に不和はない」という教えがあります。これを分かりやすい言葉で学生に「デザインは、いつも心は晴れ、正月気分で！　成せばキットできる。…くよくよ考えたらあかん！」と伝えます。

すると次の週、なんと面白いアイデアが出てくるではありませんか！　白い円の中に、黒い大きな口。その中に白い豆粒ほどの点が7～8個。目や鼻は無い。そして白い円の下から駆け足で走る二本足。尋ねてみると、このデザインの考え方は、「いつも星空を見つめるのが好き。そんなイメージを、自分のマークとしてデザイン化したんだ」と。何ともユーモラスな元気なマークで、私のひと言で、こんなに面白いデザインが出てくるとは、何とも不思議です。困っている学生には、励みの言葉、心の持ち方、改まりの言葉をかけることが大切だなぁと実感し、デザインは単なる理屈で指導するのではない、ということが改めて分かった次第です。

毎日、デザイナーとして、企業の仕事や、大学の講師をさせて頂く中で、いろいろな依頼事をどのようにとらえ、どのように生かせば、地域や、産業、文化、環境に貢献させて頂くことができるのか？そのためには、常に教えをしっかり念頭に入れて貢献させて頂くこと。人々に分かりやすく伝えるため

の、デザインの考え方とその表現が重要であること。そして最後に、デザイナーの資質、すなわち人に優しい温かい資質がなければ務まらないということ。この3点を肝に銘じて、さらに前進させて頂きたいと心に誓っているところです。

親の心

金光教放送センター

文楽の演目の一つ、『伽羅先代萩（めいぼくせんだいはぎ）』の見せ場。

「三千世界に子を持った親の心は皆一つ…」

女義太夫の語りに合わせ、谷 京子さんが操る人形は、まるで生身の人間のようです。

乙女文楽の人形遣い・谷 京子さんは、昭和12年生まれの73歳。大阪で生まれました。生まれて間もなく実の母親と生き別れ、7つで父親と死に別れた谷さん。血のつながりのない、いわゆる生（な）さぬ仲の継母親（ははおや）に育てられた生い立ち故に、〝親の心〟を知りたい、〝親の心〟に包まれたいという思いが、いつも心の底にあったからでしょ

うか、「私は、『先代萩』のこの件（くだり）が一番好きなんです」と話します。

幼い谷さんが、〝親の心〟に初めて触れたのは、生さぬ仲のお継母（かあ）さんの一途さでした。お継母さんは、朝早くから谷さんの手を引いて金光教の教会へお参りし、血のつながらない娘との間柄や、健やかな成長を祈ってくれました。

そして折に触れ、「天は父、地は母。天地のおかげで、人間は生かされて生きている。天地の恩を知らねばならないよ」と、いつも心に掛けていた金光教の教えを、優しく聞かせてもくれました。

また、生活のために始めたお茶屋の商売で帰宅が遅いので、一人寂しく眠りにつく娘のために〝おめざ〟のお菓子を用意して、眠っている娘の枕元に、そっと置いてくれるのでした。

昭和24年、12歳の谷さんは、人形遣いの道へ足を踏み入れることになります。それは、終戦後、お茶屋の商売がだめになり、住む家まで失ったことがきっかけでした。行き場のない親子は、乙女文楽の一座に加わることになったのです。

乙女文楽ではその名の通り、少女が文楽の人形を操ります。普通は3人で遣うところを1人で遣うため、両腕に装具をつけて人形を支え、遣い手の両耳と人形の頭をひもで結んで、人形の頭を動かします。少女と人形が一つになって演じる華やかさが、乙女文楽の売り物でした。

谷さんは、巡業の旅の先々で、金光教の教会を探してはお参りしてくれるお継母さんの祈りに支えら

れ、芸に磨きをかけていきました。けれども、時には、実の母親のことが頭に浮かんできます。その度に谷さんは「お継母さんが生きている限り、実の親に会いたいとは思うまい」と、決意を固めるのでした。

昭和31年、一座の解散をきっかけに、19歳の谷さんは、縁あって大阪から熱海に移り住みました。当初は、「ここでやっていけるのだろうか」と思い悩みましたが、熱海南教会の先生に胸の内を聞いてもらい、心を定めると、お継母さんも呼び寄せました。

義太夫語りの女性名人とコンビを組み、2人で乙女文楽を演じて、全国各地を飛び回る生活が始まりました。

そして、24歳でホテルマンの夫とも結婚。2人の女の子に恵まれて、仕事も家庭も順風満帆でした。

昭和45年、谷さんは33歳で、〝親の心〟に深く打たれる体験をすることになります。3人目の子どもをお腹に授かったものの、妊娠中毒症のため、6カ月もの入院生活を送った時のことでした。同じ病の入院仲間が亡くなるのを目の当たりにし、死の恐怖にさいなまれる日々。赤ちゃんは早産で亡くなり、腎臓の機能も悪化して、時間だけが流れていました。

そんな谷さんを元気付けようと、お継母さんは70代半ばの高齢にもかかわらず、毎日のように3歳の次女をおんぶし、7歳の長女の手を引いて教会へお参りした足で、病院へ来てくれました。「生さぬ仲の継母さんが、こんなにまでしてくれる。ずっと今日まで、こんなに温かい〝親の心〟に包まれていた

のだ」と、谷さんは心打たれるのでした。

うれしい面会もつかの間、手を引かれた長女が、病院の長い廊下をとぼとぼと振り返り、振り返り、帰って行きます。「付いて帰ってやりたい」「生きてやらなくては」と、何度思ったことでしょう。そんな自分の思いの中に、母親としての〝親の心〟を確かに見た谷さんでもありました。

温泉の街もまだ寝静まっている、ある朝の午前4時。谷さんは病院の屋上に上がり、全身を包む朝のすがすがしい空気の中で、教会の方に向かって手を合わせました。すると、谷さんの心も澄んできて、「生き死には、神様にお任せしよう」という気持ちになれたのです。けれども、「天は父、地は母。天地のおかげで、人間は生かされて生きている。天地の恩を知らねばならないよ」というお継母さんの言葉を思えば、「今日まで生かしてくださった神様へのご恩返しが、何一つできていない」という強い思いもまた、心の奥底から湧き出てきました。

それから早くも40年。谷さんは、かかわりのある人たちのことを神様に祈りながら、ご恩返しの心で人形遣いの仕事を続けています。大変なこともありましたが、お継母さんをみとり、2人の娘も結婚し、孫たちが自分の道を見つけて進んでいくのを、夫と共に楽しみにする毎日です。

「私は、継母と人形と神様に、ずっと生かされてきました。私ほど幸せな者はありません」と、きっぱり言い切る谷さん。お継母さんと歩んだ道のりを振り返る時、「生かされて生きている人間同士。他

人はない」と、心から思うのです。今日も谷さんは、年を重ねた深みのある芸で、観る人の心を揺さぶっています。

その一言で

金光教放送センター

「あの時病気になっていなかったら、私は今でも何も気づかず、不足だらけの毎日を送っているに違いありません」。

福島県にお住まいの本田トシ子さんは今68歳。その苦しかった時のことを振り返りながら、今、笑顔で語ってくれました。

それは、8年前のことです。近くのアパートで一人暮らしをしていた35歳の一人息子が結婚することになりました。そして、それを機に息子夫婦との同居が始まりました。ですが同居することには、実は少し不安がありました。というのも、定年退職し

た夫との2人暮らしが長い私たちと、18年も離れて生活をしていた息子とが、うまくやっていけるかどうか心配だったからです。

同居を始めてすぐに、その心配は現実になってしまいました。住まいを増築することにしていたのですが、完成までは狭い家でお互いに譲り合って生活をしていかねばなりません。例えば、トイレの使用一つとっても気を遣いました。「勤め人の息子が最優先」と思っていましたので、主人にも、「息子が起きる前にトイレに行っておいてください」と毎朝せかしたり、お風呂にしても、息子が仕事から帰る前には、済ませるようにしました。

食事の準備は、「慣れない嫁がするよりは」と私が受け持ったのですが、一生懸命作っても息子から注文が付くのです。親子であっても、私はだんだんと面白くなくなってきました。増築についても、私たちと息子の意見は食い違うばかりです。

主人もそんな毎日が続いていくうちに、「なぜ自分の家で遠慮しなくてはいかんのだ」と言い出しました。それでも息子には直接何も言わず、全部私に向かって言うのです。主人は日に日に元気をなくし、そんな姿を見ている私もつらくなりました。

そのうち、息子と顔を合わすと、すぐに言い争うようになってしまいました。それは家の増築が完成してからも続き、私は食欲もなくなり、食事もろくにのどを通らないような日が続きました。

「同居したのは間違いだったのだ」という後悔が日に日に強くなり、「もう家にいたくない、出てい

きたい」、そこまで追い詰められていました。

そんな、もんもんとする日が続いていたある日、私の左ひざが急に痛くなったのです。その痛みがあまりにも激しいので近くの病院で診てもらうと、「特発性関節壊死」という骨がつぶれてしまう病気で、お医者さんからは、「3か月は松葉づえを使ってください。悪い方の足を使うと、再生しようとしている骨が砕けてしまいますからね。もし、3か月で痛みが治まらないようであれば人工骨になります」。そう言われたのです。

まさか、歩けなくなることなど考えてもいませんでしたから、「人工骨」という言葉を聞かされた時にはものすごいショックで、頭が真っ白になってしまいました。

意気消沈しながら、いつもお参りしている教会に参拝し、先生にお話しすると、「どうしてこんな病気になってしまったのか、ということにとらわれてはいけませんよ。悔やむのではなく、今まで元気に過ごせてきたことを神様にお礼することが大切です。あとは、しっかり治療を受けさせてもらいましょう」と話してくださいました。私は、こんな病気になるまでは、歩けることは当たり前で、歩けることへのお礼など考えたこともありませんでした。

うちに帰ると、家族が心配して待っていてくれました。そして息子の口から思いもかけない言葉を聞かされたのです。

「お母さん、栄養のあるものをいっぱい食べて、早く良くなってよ。うちのことは何も心配しなくて

いいから」。その一言で、ハッと目がさめた気持ちがしました。私は「顔も見たくない」とまで思っていたのに、息子は私のことを心配していてくれたのです。

次の日から、家族の協力の中でリハビリが始まりました。毎日の食事の準備は嫁が頑張ってくれました。息子も、「今日はおいしいものを食べに行こう」と、松葉づえの私をたびたび外食に誘っては、家族の楽しい時間を作ってくれました。困った時には、家族がこうして手を差し伸べてくれているのに、私は一体、自分一人で何を頑張っていたのだろうかという思いが、日に日に強くなっていきました。

思い起こせば、私が教会にお参りするようになったきっかけは、息子の就職の時でした。それからずっと、信心をしているつもりでいました。でも、よくよく考えてみると、「信心をしている」と言っても、それはただ、自分の身勝手な思いを神様に訴えていただけだったような気がしてきたのです。

そして、信心をする上で最も大切な〝人の助かりを願う〟ことができていなかったばかりか、思いやりの心のかけらも持たないで、ただ息子を責めるだけの心になっていた自分に気付き、そのことを一生懸命神様におわびしました。そのおわびの生活を続けているうちに、この「特発性関節壊死」という病気になったのも、私の身勝手さが原因だったのかもしれないと思うようになりました。

治療を始めて50日で痛みも和らぎ、それからは驚くほど回復し、元気になることができました。私は

この病気をしたことで、息子から思いやりの言葉をかけてもらいましたが、今思うと、あれはきっと、神様が息子の口を通してかけてくださった言葉のように思うのです。そのひと言で私は救われ、何事にも感謝の心が大切であることを分からせて頂いたのです。

赤線拾い

鳥越正克

厳しい日本経済を背景に、あのスーパーが安いと聞けば押し合いへし合いして、必要のない物まで買い求める人の群れ。店頭の無料試供品を目にすれば、根こそぎ持ち去るあさましい人の姿。「貧すれば鈍する」のことわざの通り、神様の子・人間としての品格はどこへやら。かく嘆く私にも、苦い経験があります。

今から50年以上も前、小学3年生の夏休みの深夜。「火事だぞ！　みんな起きろ」。父の大きな声に弾かれるように起きた私は、隣の部屋に連れて行かれました。その部屋は金光教の神様をお祭りしている部屋で、父は神様に一礼すると私を担ぎ、外の

通りに放るようにして置きました。

そこで見たものは、わが家の向かいにある、筑豊の炭坑街でも1、2位を競う大きな映画館が炎に包まれている場面でした。まるで紅蓮（ぐれん）の竜が漆黒（しっこく）の天に昇り、弾ける火花は赤い水しぶきに見えました。消火に当たる消防団の姿が炎に映し出され、影絵のようでした。

その光景をぼんやりと眺めていた私は「危ないぞ、どかんか！」と消防団のおじさんにしかられ、ようやく我に返りました。と同時に、激しく雨が降り掛かってきました。それは、火の手の勢いに押された消防団が、消火をあきらめ延焼を防ぐために、わが家の屋根や板塀に放水を始めたものでした。

「いよいよ家が燃える」と思った私は、急に怖くなりながらも、大きなブリキ製のバケツを持ち出して消火に当たりました。チョロチョロとしか出ない蛇口をひねり、はやる思いを抑えながらバケツに水をためるのです。ようやく満タンになったものの重くて走れず、それに足の震えも加わって「エイ！」と放水するも、板塀の手前に、パシャリとむなしく落ちるのです。やがて、映画館は全焼して火は消えました。

朝早く目をこすりながら焼け跡に行くと、ロープが張られてお巡りさんの現場検証が行われていました。群衆の最前列は、坊主頭の子どもたちが陣取っていました。子どものお目当ては〝赤線〟拾いです。

当時の私たちは、電線に使う銅線のことを赤線と呼び、拾い集めてはくず鉄屋に持って行き、量り売

りをするのです。貧しい時代でもあり、小遣いなどもらえない私たちにとっては、アイスキャンデーやレモン水を買う貴重な財源です。ちなみに、アイスキャンデーは1本5円でした。

この時もお巡りさんが引き揚げるのを、今か、今かと待っていました。やがてその時が来ました。私はロープを飛び越えて、地をはいながら野良犬のように赤線を探しました。ガキ大将から足を踏まれ、手を払われながらも必死でした。そんな中で10円玉1枚を拾ったのです。10円玉の焼け焦げた表面は砂でこすり、黄金色に輝くのを見届けてポケットにねじ込みました。もうその時は、スキップしながら空に向かって「ヤッホー」と叫びたくなるほどルンルン気分でした。

この日は陽が沈むまでに、かなりまとまった赤線を拾って家に帰りました。迎えに出た母は、顔中すすだらけの私が握り締めている赤線をチラリと見て、「今まで何をしていたの、早くご飯を頂きなさい」と言っただけで、しかられませんでした。

でも、母が父に話したのでしょう。夕食も終わり、後片づけをしていた私の後ろから父が、「お前が拾った赤線は映画館の物ぞ。明日にも元の場所に戻しておきなさい」と言い残し、その場を離れました。父は常日ごろから私に、「どんな時でも、神様が見ておられるもんなあ」と、口癖のように言っていました。それはきっと私に、「神様の子・人間として、神様の思いに恥じない生き方をしてほしい」との願いを込めてのことでしょう。

しかし、当時の私は、父の願いを理解できるはずもなく、心の中で「ほかの子はみな拾っているのに、どうして僕だけが拾ってはいけないのか。僕だけが損をしてばからしい」と、父を恨みました。

でも、なぜか私は、その日のうちに焼け跡へ行きました。張られたロープの前でしばらく悩みましたが、勇気を出してロープをまたいで赤線を置いて走って帰りました。でも、ポケットの10円玉は、玄関前にあった植木鉢の下に隠したのです。しかし、父の言葉が心に妙に引っ掛かり、とうとう10円玉を持って家を出ました。そして悔しさもあり、誰からも拾われないように穴を掘って、土に埋めました。

私の人生を振り返ってみると、これまでも抱いたわが子のためとはいえど、列を乱し、電車に走り込み座席の取り合いもしました。お年寄りを目の前にしながら、痛む心にふたをして、目を合わせないようにと寝たふりもしました。今でも思い出すと、その時の情景が浮かび、心がうずきます。

聞くところによると、人の多くは、してはならないことをした時には、いつまでも心が痛みうずくと言います。世間ではそのことを、良心が痛むと言うのでしょうが、父からは「それはなぁ、そうした人間の姿を見ておられる神様が、悲しんでおられるのだよ」と聞かされてきました。これからも、「このくらいは」と周りの様子を見て行動し、正しさと欲のはざまに心揺れる危うい私ですが、亡き父の「どんな時でも、神様が見ておられるもんなあ」の言葉を忘れることなく、神様の子・人間として、神様の

思いに恥じない生き方を、孫と一緒に求めていきたいと思います。

お役に立つ人になります

原田恵一郎

私が奉仕する教会に、沙也香さんという大学1年の女の子がいます。この沙也香さんは、生まれた時から両親に連れられて教会に参っていました。教会には子ども会があります。この沙也香さんも、幼い時からその子ども会の集会にはよく来ていました。

この子ども会には、誓いの言葉があります。それは、「教祖様の教えにより信心を進め、お役に立つ人になります」というものです。この「お役に立つ人」になることを願いとする子ども会は、野外活動を中心に、駅前での募金活動や施設への慰問活動、災害復旧活動などのボランティア活動を含めて、月に2回ほどの集会を行っています。その沙也香さん

も、子ども会でのボランティア活動の中で、さまざまな苦労はあっても、それをやり遂げた達成感と充実感を味わって育ったうちの一人です。

そんな沙也香さんも高校生となり、進路を考えるころとなりました。２年生になった一昨年のこと、「国際関係」という授業で大変な衝撃を受けました。

世界の多くの子どもたちが学校にも行けず、働かされているという現実を知りました。また、貧しい国での児童虐待のことや、児童の労働に対して、不当に賃金を支払わないという事実も知りました。そんな世界で起きている問題を学んだ時、自分の生活がこの上もなく恵まれていることを知ったのです。そして、沙也香さんは心に誓ったのです。「私は将来、難民の子どもたちを助ける仕事に就きたい」と。

そう誓った沙也香さんは、いろんな大学の資料を集めました。その中で、Ａ大学の国際関係学部の資料に巡り合い、昨年の夏休み、入学を希望する人たちに施設を紹介するオープンキャンパスに行きました。そこは、予想以上に国際関係を勉強するには最適な大学でした。でも、沙也香さんの学力では到底難しい大学であることも事実でした。「でも入学したい！　この大学で勉強したい！」という思いで、胸がいっぱいになりました。

沙也香さんは、私の奉仕する教会に参ってきました。「先生！　昨日、Ａ大学のオープンキャンパスに行って来ました。心から入学したい大学に巡り合いました。一生懸命に勉強しますので、ぜひ合格させてください」と願って来たのです。私は、その真

剣な眼差しに打たれて、神様に取り次ぐ祈りを捧げました。

それから私は、毎日祈り続けました。そして約４カ月が過ぎた秋に、推薦入試を受けました。その結果は、残念ながら不合格でした。そして年が明け、一般入試を受けることになりました。そして、そのＡ大学以外にＢ大学も受験をしました。Ａ大学に至っては２回受験しましたが、いずれも不合格でした。でも、Ｂ大学には合格しました。教会にやって来た沙也香さんは、「神様にお願いして、やるだけのことはやった結果です。Ｂ大学に行って、これからも難民の子どもを助ける仕事に就く、という夢はあきらめずに頑張ります」と、元気に話しました。

ところが次の日の朝、担任の先生から電話が掛かってきたのです。その内容は、「沙也香さんが非常に頑張っていたことは、先生もよく知っている。だから非常に残念でならない。できれば、３月の後期試験に再チャレンジしてみないか！」というものだったのです。しかし、沙也香さんは、長い間の受験勉強に疲れ、気力も限界に達していました。もう、今から気持ちを切り替えての受験はできませんと、担任の先生には申し訳ない気持ちいっぱいでお断りしたのです。

電話を切り、部屋に戻った沙也香さんは、机に向かってメモに「私はＢ大学に行くんだ！」「私はＢ大学に行くんだ！」と何回も書いては、自分に言い聞かせていました。しかし、担任の先生の言葉がどうしても耳から離れず、沙也香さんは、学校に行っ

て担任の先生と話し合うことにしたのです。

家族や担任の先生と話し合った沙也香さんは、教会に参って来ました。そして開口一番、私に「やっぱり先生！　Ａ大学の国際関係学部に行きたい！　今、担任の先生とも話し合ってきました」と言って、その場で泣き崩れたのです。私は沙也香さんの一心に打たれて目頭が熱くなり、思わず「悔いが残るか！」と聞きました。すると沙也香さんは、「はい」と答えました。「じゃ分かった！　願い主があきらめてはならない。難民の子どもたちを助けるための仕事に就くことに、一番適した大学であり、そのチャンスがあるんであれば、その夢に向かって、もう１回挑戦してみよう！」と申しました。

そして３週間後、４回目の挑戦となるＡ大学受験に取り組んだのです。ところがその結果は、またしても不合格でした。

その報告に、教会に来た沙也香さんは、なぜかさっぱりした面持ちでした。それは、沙也香さんのお母さんがいつも言う「神様にお願いしてできた結果は、あとあとすべてよし。おかげになる」と、幼い時から聞かされていたからこその潔さでした。

その沙也香さんは私に言いました。「先生、不合格でした！　でも夢に向かってＢ大学で頑張ります！　夢は諦めません。…わたし、お役に立つ人になれますよね、先生」。

そう言って私と固い握手をかわした彼女の眼差しは、未来に向かって光り輝いていました。

KONKOKYO

金光教本部　ラジオ放送係

【住所】719-0111
岡山県浅口市金光町大谷 320
【電話】0865-42-6453
【FAX】0865-42-2114
【メール】w-master@konkokyo.or.jp